

## 「死刑判決」

2014年12月02日

マルコによる福音書 15章6節～15節。ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願う囚人を一人釈放していた。さて、暴動のとき人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。群衆が押しかけて来て、いつものようにしてほしいと要求し始めた。そこで、ピラトは、「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。祭司長たちがイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。祭司長たちは、バラバの方を釈放してもらうように群衆を扇動した。そこで、ピラトは改めて、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。群衆はまた叫んだ。「十字架につけろ。」ピラトは言った。「いったいどんな悪事を働いたというのか。」群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び立てた。ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

時は「過越祭」である。この祭の時には、囚人を一人恩赦する慣わしがあった。バラバという暴動を起こし、人を殺害した囚人がいた。彼は単なる殺人者ではなく、ローマの支配に反抗して、おそらくローマ兵を殺害したのであろう。イスラエル人からすれば、愛国者である。群衆はいつものように、祭の恩赦を求めた。ピラトは恩赦を与えるつもりで「あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と主イエスの釈放を誘った。彼は、主イエスはローマに反逆する革命家ではなく、最高法院の訴えは宗教上の妬みであることが分かっていたので、主イエスを釈放したいと水を向けた。ところが、最高法院は群衆を扇動して、バラバの釈放を要求した。ピラトは改めて「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と問うた。群衆は声を合わせ「十字架につけろ」と叫んだ。ピラトは戸惑い「いったいどんな悪事を働いたというのか」と問い返した。彼は、主イエスに罪状はないと確信していたからである。しかし、群衆はますます激しく「十字架につけろ」と叫び続けた。彼らは最高法院に動員された人々であっただろうが、中には主イエスが、ろばの子に乗ってエルサレムに入城した時「ホサナ」と叫び、イスラエルの独立、解放をもたらすダビデ王の再来を期待し、大歓喜して迎えた人々もいただろう。しかし彼らも、最高法院で痛めつけられ憔悴し切って、ピラトに尋問される弱々しい主イエスを見て失望し、周りの声に迎合した。ピラトは群衆の要求を受け入れ、バラバを釈放した。そして、主イエスに十字架刑を宣告し、鞭打った後、執行のためローマ兵に引き渡した。ローマの総督ピラトによって、主イエスの十字架刑が決定した。最高法院は自分たちの手ではなく、ピラトの手で死刑を執行させる策略に成功した。

ピラトはなぜ主イエスの無罪を知りつつも、十字架刑を宣告したのであろうか。彼はユダヤの総督を、2年任期を5期10年間、強権を持って支配した。ローマに反抗する多くの人々を虐殺してきた強権をもってすれば、バラバを死刑にし、主イエスの釈放は可能であったはずである。この背後には、ピラトを支えたローマの高官の失脚があったと言われている。後ろ盾を失ったピラトは弱気になり、最高法院の圧力に屈し、要求を飲まざるを得なかった。政治家は正義ではなく、周りの力学によって左右される。主イエスは不法の中、黙々として「苦役を課せられて、かがみ込み 彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように」ローマへの反逆者として十字架刑に処せられていった。